

さわやかな初夏の季節。今年も朴葉ずしの時季が巡ってきました。それぞれの作り方でそれぞれの家庭の味があり、故郷の味として遠方の御親戚などへ送られる方も多いことでしょう。

村を離れて暮らす皆さんを繋ぐ故郷の味をいつまでも大切にしていきたいものです。

朴葉ずしといえば忘れられない思い出があります。平成の初めのころ「朴葉ずしまつり」というイベントがこの時期に実施されていました。このイベントでは“朴葉ずしコンテスト”という企画がありアイデア満載の新しい朴葉ずしの料理コンテストを行ない、又“朴葉ずしバイキング”というコーナーでは参加者が用意された食材で自分の好みの朴葉ずしを作って楽しむというものでした。はなのき会館のステージに朴の木を立て、その下で弦楽四重奏などのコンサートを楽しむ企画もあり、忙しかったけれども楽しいイベントでした。町村合併論議に飲み込まれた形で中止になってしまいましたが、懐かしく思い出されます。

さて、6月の声とともに入梅となり、忘れてはならないのが大雨や台風などの自然災害への備えです。

5月には自主防災会長会議、岐阜県の危機管理トップフォーラムなど、防災について考える機会が多くありました。

そのトップフォーラムで京都大学防災研究所の矢守教授の講演から、避難行動について皆さんに考えていただきたい3つのキーワードの話がありましたので紹介します。

①各人がそれぞれ「避難スイッチ」というのを持つべきであること。

これは行政が発する避難指示などとは別に、例えば裏の谷の水が増水して溢れ出したり、山からの水が法面から吹き出てきたりしたら避難開始の合図、というようにそれぞれが決め事として意識しておくことが必要であるということです。

②「セカンドベスト」を考えておくこと。

これは行政の指示する避難場所だけでなく、夜間の大雨洪水の場合は避難所へ移動するより自宅の高いところへ避難したり、お隣の2階へ避難させてもらったり、それぞれの御家庭で考えておくことが重要であるということです。

③「空振りより素振りの考え」

これは避難指示の度に避難することが徒労で終われば被災しなくて良かったと考え、空振りに終わった避難をいざという時の訓練(素振り)だと割り切って、何回でも避難行動をすることが大切ということです。

まさに災害は忘れた頃に起きます。行政がやるべきことと地域がやるべきこと、個人の責任でやるべきことをしっかりと認識して、日頃の生活や防災訓練を通じて災害に強い村を目指したいと考えています。

移住定住政策の成果が上がってきています。令和3年度の実績は問い合わせ件数180件、物件見学77組156名、移住体験8組20名でした。この中で移住定住を決めていただいた方の人数は30名(大人20名、高校生以下10名)で年間目標の12世帯を達成できました。これからも確実に増えてくると予想される移住定住された方々を自治会や集落で温かく受け入れていただき、新たなコミュニティが築かれていくことを願っております。

令和4年6月1日

東白川村長 今井俊郎